

Strix 7 : 263-266 (1988)

住宅地で繁殖したツミ *Accipiter gularis*平野敏明¹・石田博之²・国友妙子²

ツミ *Accipiter gularis* は、日本では北海道、本州、九州の低山帯の森林で繁殖が確認されている(日本野鳥の会 1980)。一方、いくつかの地域では住宅密集地に残された林や、住宅地に隣接した林でも繁殖行動が観察されており、一部の研究者から都市環境への進出とのからみで注目されている(大庭 1988)。しかし、これら住宅密集地の林でのツミの繁殖記録はあるものの、営巣地の樹種構成や周囲の環境についての詳しい報告はいまだない。筆者らは、1988年3月から7月にかけて栃木県宇都宮市の住宅地に残存する小面積の林でツミの繁殖を観察した。ここでは、おもに森林面積や樹種構成など営巣地の環境について報告する。

観察地は、栃木県宇都宮市石井町(36° 32' N, 139° 55' E, 標高106m)の住宅地にパッチ状に残された林の一つである(図1)。この地域を境にして西側には住宅地が、東側には水田地帯が広がっている。巣を中心に半径1kmの範囲における森林面積の合計は約24.4haで、図1からもわかるように小面積の林が点在して残っている。一つ一つの林の面積は、大きいものでも約2.6haで、多くは1ha以下である。大部分の樹種は樹高6~8mのコナラやニセアカシヤ、エゴノキで、20m前後のサワラやヒノキ、15m前後のアカマツも少数混在している。

営巣地の林(A)は、周囲を住宅地に囲まれた面積約0.9haの林で、隣接する林から少なくとも約70m離れている。林の4分の1は樹高20m前後のサワラが茂り、残り4分の3は樹高6~8mのコナラ、ニセアカシヤ、エゴノキなどの落葉広葉樹が占めている。落葉広葉樹のなかに樹高15m前後のアカマツが10数本点在している。低木層や下草はあまり発達せず、わずかにヤマウルシやクリの幼樹、ヤブムラサキがみられる程度である。林内には数本の踏みわけ道があり、付近の住民の近道として利用されている。休日や土曜の午後には小学生が林内で遊ぶ姿がみられた。

巣は、林のほぼ中央の樹高15m、胸高直径25cmのアカマツの地上14mのところに造られていた。営巣木の南-東側にはサワラがあり、北-西側には広葉樹がおおっている。図2は営巣木の周囲のおおまかな断面図を示している。図からもわかるように、営巣木の上空はひらけていて、巣は広葉樹の樹冠の上に突きでたかたちになっていた。

この付近ではじめてツミの生息を観察したのは、1988年3月23日に営巣地から南西に約700mほど離れた林(図1のB)だった。落葉広葉樹林の林縁にあるアカマツから飛び立

1988年12月29日受理

1. 〒320 宇都宮市吉野2-3-15 戸室 方
2. 〒321 宇都宮市峰町350 宇都宮大学探鳥会

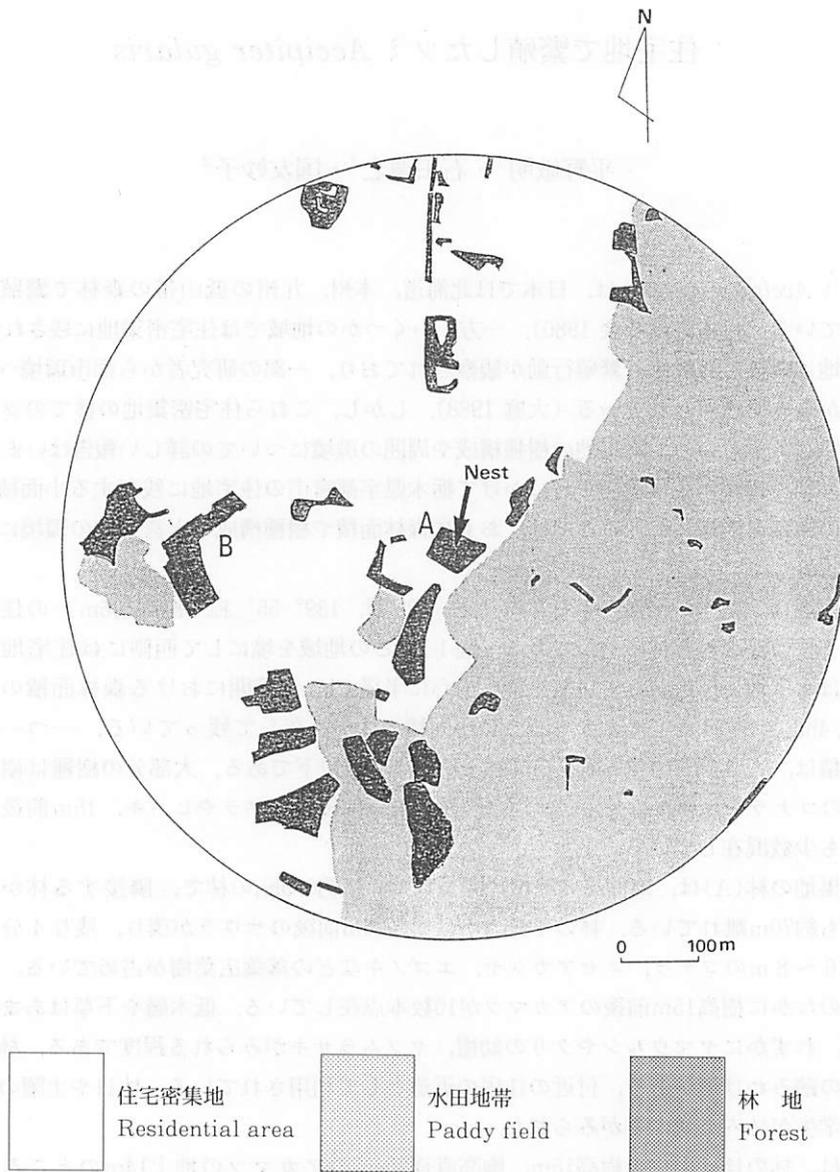


図1. 巣を中心に半径1km以内の環境の概要

Fig.1. Breeding environment within a radius of one kilometer around the nest.

つ雌を観察した。このとき樹高9mのアカマツに巣らしいものがあった。翌日にはこの場所であいが観察された。3月29日、コナラの枝で交尾を観察した。しかし、この林では4月9日以降ツミの姿はみられなくなり、アカマツの巣らしいところにはキジバトが入っていた。付近の林を探したところ営巣地となった林(A)で警戒するつがいを観察した。4月11日にはアカマツに巣を観察した(ただしこの時点ではツミの巣かどうか不明だった)。4月26日、抱卵を確認した。6月10日、大きさの異なる4羽のヒナを観察した。このうち

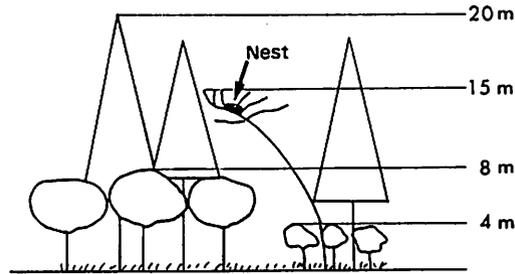


図2. 営巣木の略図

Fig.2. A rough sketch of the nesting place.

成長の早い2羽は褐色の羽毛におおわれ、さかんに羽ばたいていたが、残りの2羽はまだ白い綿毛におおわれていた。6月14日ごろから成長の早いヒナは巣外にでており、6月20日にはすべてのヒナが巣立ちした。巣立ちしたヒナは、営巣木の近くにあるサワラの下に止まっていることが多かった。7月上旬までは営巣地で観察され、7月7日にはヒナ1羽が親鳥1羽とBの林で観察された。

親鳥は林外から直接巣へ入るため、ヒナの食物についてはまったく調べられなかった。ただし親鳥がよく利用するサワラの下にスズメと思われる羽毛が多数散乱しているのを観察した。また、2度ほどにぎりこぶしくらいの獲物を運ぶのを観察した。抱卵期から巣立ち後育雛期にかけての約20時間の観察中に、親鳥は営巣地の林では1度も狩りを行わず、林から南-西の方角に飛び去った。どの範囲の林を利用しているかは明らかでなかったが、6月10日にはBの林から獲物をつかんで巣の方角へ飛ぶのが観察された。

親鳥は、巣に近づくハシボソガラス、オナガ、キジバトに対してはげしく攻撃した。また、観察者に対しては、抱卵期から巣内ヒナの段階ではあまり警戒行動をとらなかったが、巣立ち直後からは著しく警戒をするようになり、直接攻撃をすることもあった。

このように、住宅地に残された小面積の林でツミが無事4羽のヒナを育てたわけだが、内田(1986)によるとツミの営巣木としてはアカマツが多いことがわかる。今回の繁殖例においても、サワラや広葉樹ではなく最も数の少ないアカマツを選んでいる。この点で、コナラやニセアカシヤからなるBの林は、Aの3倍の面積があるにもかかわらず営巣場所には好ましくなかったと思われる。さらに、親鳥、巣立ちヒナともサワラの木を休憩などによく利用していたので、針葉樹の存在も必要なのかもしれない。清棲(1978)はツミの食物として主に小鳥類や小型のは乳類を報告している。さらに、大庭(1988)はツミがオナガを頻繁に捕食することを記載している。この地域ではツミの食物としてスズメやシジュウカラ、カワラヒワ、ホオジロ、ムクドリ、オナガ、ヒヨドリがあげられる。特にこの時期、多数のスズメが住宅地の林で採食しているのが観察されているので、ツミの重要な食物となっていると思われる。

最後に、ツミを観察していて気づいたことだが、観察者をはじめ人間に対してあまり人おじしないことがあげられる。個体差もあると思われるが、今回のつがいの場合、巣立ち後を別にすれば人間に対してほとんど警戒しなかった。30~40mの距離を保てば交尾さえも観察することができた。同様のことは、宇都宮のほかのつがいでもあてはまった。こう

した人おじしない性質は、人家に隣接した小面積の林で繁殖する場合に大切な要因と思われる。

引用文献

- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.
 日本野鳥の会. 1980. 鳥類繁殖地図調査1987. 日本野鳥の会, 東京.
 大庭健二. 1988. 猛禽類の都市進出. 都市鳥研究会. 都市に生きる野鳥の生態. 32-36. 都市鳥研究会, 和光市.
 内田博. 1986. 猛禽類の巣の近くで繁殖する鳥について. 日本鳥学会誌. 35: 25-32.

A breeding record of the Japanese Lesser Sparrowhawk *Accipiter gularis* in the residential area of Utsunomiya

Toshiaki Hirano¹ · Hiroyuki Ishida² · Taeko Kunitomo²

We observed a pair of the Japanese Lesser Sparrowhawk *Accipiter gularis* that bred in a small forest patch (0.9ha) adjacent to residential areas in Utsunomiya, central Honshu. Four young fledged in mid June 1988. The total area of patchy woodlands within a radius of one kilometer of the nest is about 24.4 ha. The tameness of this species may be a reason why they breed in such a small forest patch close to residential areas.

1. c/o Tomuro, 2-3-15 Yoshino, Utsunomiya, Tochigi 320.
2. Birdwatching club of Utsunomiya University, 350 Minemachi, Utsunomiya, Tochigi 321.